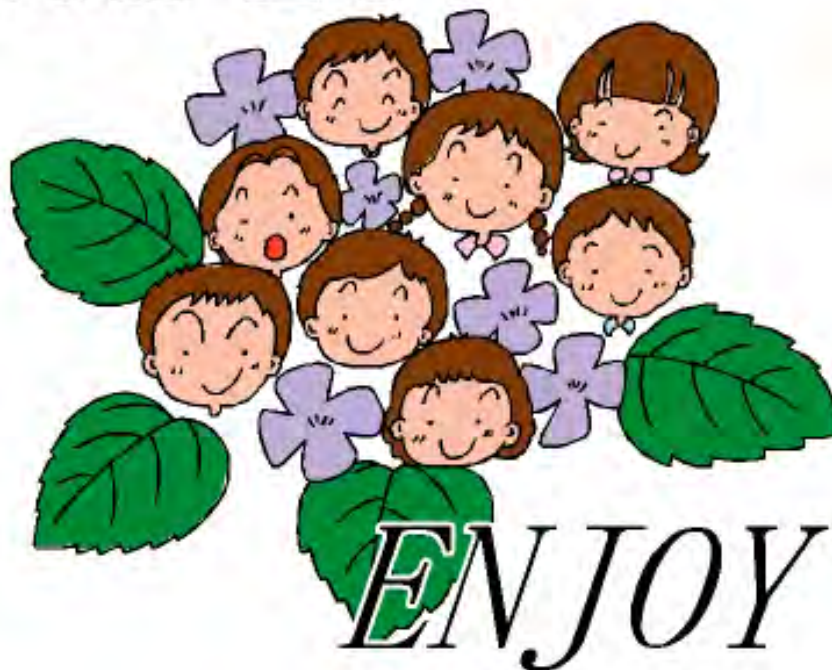


木古内まちづくり体験観光

危機管理マニュアル

SAFETY



木古内まちづくり体験観光推進協議会

1. 危機管理の定義

体験型の教育旅行は、多数の児童及び生徒が一同に会して、見知らぬ地域や人々と関わる非日常的な活動であり、そこには自然や環境などに関わる様々な危険が伴うものである。

本会は、安心・安全な活動が行えるように十分なスタッフの確保、綿密な事前打合せ、計画的な当日運営の態勢づくりに努めるとともに、万が一に事故及び災害等が生じた場合に児童及び生徒の生命の保全を第一義として対処するために、危機管理マニュアルを定める。

2. 危険の種類と対応

1) 自然現象・気象などに関する危険

危険の種類	危険への対応	備考
地震・津波	地震や津波は突然生ずる事象であることから、冷静且つ的確な判断のもとに人命第一として対処する。 屋外の場合は、津波や崖崩れ、建物の崩壊などの周囲の状況を確認し、安全な場所を確保して1ヶ所に集める。 屋内の場合は全員を落ち着かせて屋外へ飛び出さないようにさせ机等の頑強なものの下に避難させる。火気を使用している場合は、指導者が的確な判断のもとに消火する。 海岸付近の場合は津波を想定し、速やかに海岸から離れるように避難します。 ラジオ等により正しい情報を収集し、冷静且つ的確な判断のもとに避難誘導する。	
落雷	落雷も突然生ずる自然事象であり、速やかに安全な場所へ避難する。同時に気象情報の推移を入手して行動する。	
台風・暴風雨	事前に的確な情報を入手して活動の可否を判断する。特に台風等の通過後の活動については、河川の増水や崖崩れなど環境の変化に留意する。	
雪崩・吹雪	冬期間の活動は急激な気象変化など通常でも厳しい環境にあることから、事前の確認を徹底する。	

2) 動植物に関する危険

危険の種類	危険への対応	備考
スズメバチ	活動中に発見した場合は、蜂を刺激せず、ただちに巣から遠ざかります。さされた場合には、ショックによる危険もあるので、冷やすなどして速やかに医療機関に引き継ぎます。黒に反応するので、必ず帽子をかぶり衣服は黒色を避ける。	
毒蛇	道南に生息する毒蛇としてマムシがあり、気付かずに踏んだり、腰を下ろした時に噛まれることがある。 噛まれた場合には、傷口を切る、毒を吸う、冷やすなどの処置は行わず、安静にして直ちに病院に運ぶ。	
ヒグマ	ヒグマが出没する場所での活動は避ける。多く出没する時期があるので行政等の情報を事前に確認する。	
キツネ	今では食べ物を求めて人里まで広く出没する。出くわしても危険性はないが、エキノコックスを持っていることから出没する場所では特に衛生面には留意する。	

野犬・猿	食料をねらって活動場所へ出没する場合がある。食材は室内などで管理し、残飯は土に埋めたりせずに完全に処理する。	
クラゲ	海の代表的な危険生物はクラゲ類です。出現しやすい時期には特に事前注意し、刺された場合には、海水で洗い冷やして、医師の治療を受ける。	
ウルシ	ヌルデ、ハゼノキ、ツタウルシなど様々な種類がある。近づかないことが第一で、触れてかぶれた場合には抗ヒスタミン剤軟膏を塗る。	
キノコ	毒性を持つキノコは種類も多く、誤った判別方法などが言い伝えられており、専門家の指導による以外は手を出さない。	
木の実	くわの実やコクワ、山ぶどうなど食用できる木の実は数多くあるが、シキミ、ドクウツギなど果実に毒をもつものや、根や葉に毒性のあるものも各種あるので、むやみに自然の木の実は口にしない。	

3) 人や環境に関わる危険

危険の種類	危険への対応	備考
建物火災	特定の建物を活動場所又は宿泊場所とする場合は、非常口や避難経路を確認し、参加者にも事前に周知理解させる。火災が生じた場合は、消火よりも的確な指示のもとに安全な場所へ避難誘導することを優先する。同時に速やかに所轄の消防署へ通報する。	
食中毒	炊事場や炊事用具、食器を常に清潔に保ち、傷みやすい食品は持ち越さずに廃棄処理する。また調理する人は手洗い等の衛生面に配慮する。特に生物の焼き料理は完全に火を通すなど指導を徹底する。 食中毒の疑いが生じた時は速やかに医師の診断を受け、所轄の保健所に通報する。	
食物アレルギー	参加者個々の食物アレルギーの有無を事前把握する。アレルギーのある参加者には、その原因となる食材を除く。アレルギー症状が生じた場合は速やかに医師の診断を受ける。	
井戸・水路・池	構造や存在自体に危険性があるものは、事前把握し、その危険性を説明するとともに、近寄らないように指導徹底する。	
参加者の行為	自らマナーやルールを守ること、互いを思いやって行動することなど、集団活動の基本を周知徹底する。また、あわてたり、逆に安易に行動することが事故を生むことも周知するなど、指導体制を徹底する。	
参加者の状態	暗い、狭い、濡れているなど活動に不十分な環境では特に留意し、常に安全な活動環境を提供する。 参加者の心身の状態を十分に把握し、また年齢差も考慮し、時間的、体力的に余裕を持ったプログラムを作成する。 活動に熱中して周囲の状況を的確に把握できなくなっているかを判断する。 病気やけがをしている場合は、無理をさせることなく、特に危険性が考えられる場合は、活動参加をやめさせる。	
他人による過失	自分の周囲にいる人の故意や過失により、被害を受ける場合があり、自分のことだけでなく、周囲にも気を配る必要がある。また自分の行為が、周囲の人に被害を及ぼさないように自ら判断注意する。	

4) 運営体制に関する危険

危険の種類	危険への対応	備考
乗物	活動時、移動時に使用する乗物については、運転手等の心身を含めた安全管理を徹底する。また乗物自体は法的措置を遵守し常に整備等を怠らない。 事故等が生じた場合は定められた手法に基づいて速やかに対処する。	
道具・装備	活動のための道具や装備は、その目的、用途、参加者のレベル、人数、プログラムなどに合ったものを準備する。また目的外の使用は絶対に避ける。 更に、規格が使用目的に合っているか、古くなったり、傷が付いたりして安全性が低下していないかを事前確認する。	
能力・体力・技量	参加者個々の能力や体力、技量に基づいたプログラム、環境、使用物を考慮する。また、危険性を感じ取ったり、危険に対して瞬時に適切な行動が取れる判断能力も必要。	

3. 事故等が生じた場合の対応

1) 事故者の確認・救助・応急処置・搬送

状況の把握

まず自分自身が冷静になる。事故全体の状況を正しく迅速に判断する。事故者が何名いて、どういう状況であるのか、それにより、ただちに何をすべきか判断する。

次に、本部スタッフに連絡して指示を仰ぎ、直接必要な場合は警察署、消防署、医療機関に連絡する。(救急車の要請)

自分自身の安全を確保する

救助にあたる場合には、意外に自分自身の安全を忘れがちです。そのために二次災害を引き起こしてしまう可能性もあるので、十分に注意する。

事故者以外の人々の安全を確保する。

事故が起きた場合、どうしても事故者の方に目を奪われがちですが、それ以外の人たちの安全を確保したうえで救助に向かう必要がある。

救助に向かう判断

現場のスタッフだけで十分に対応できる状況なのかを判断する。。無理な場合は協力者を得るために連絡をとる。連絡のために移動する場合は必ず二人以上で確かな情報をもって行動する。

応急処置

事故者の様子を見ながら、心臓停止、呼吸停止、大出血など生命に関わる状態のときは、直ちに心肺蘇生や止血などの応急手当を行う。

応急処置は、救急車や医療機関に引き継ぐまでの緊急の対応で、時間に余裕のある場合は、救急隊員等から指示に従って処置を続ける。

事故者の搬送

原則として事故者の搬送は救急車やレスキュー隊に任せる。その場所が危険であるとか、救急車が入れない、一刻も早く医療機関へ運ぶ必要がある場合は安全を確保して救助者が搬送する。

医療機関への引き渡し

事故者を専門の医療機関へ渡し、事故者以外の人たちが安全な場所へ移動させ、落ち着いて次取るべき行動を考えます。

他の関係者への連絡

本部スタッフの指示を受けて、必要な関係者に連絡をする。

2) 関係者への連絡体制

本部スタッフへの連絡

主催者を含む組織本部の責任者にまず連絡を取り、そこからの指示を受けます。

参加者の保護者への連絡については、組織本部スタッフが速やかに正確に行う。

警察、関係機関への連絡

被害の拡大を防ぐためにも、支援が受けられる関係機関と連絡を取り、状況を正しく伝えとともに、その指示に従って行動する。

保護者への連絡

被害にあった参加者の保護者に連絡します。保護者には冷静に対処してもらうために明確な状況説明を行う。状況が不明確な場合は次の連絡まで冷静な待機を要請する。また、それ以外の参加者についても、必要であれば連絡を行う。

保険会社への連絡

関係機関及び保護者等に連絡し全体状況を確認した跡、速やかに所定の保険会社に連絡し必要な手続きに着手する。

傷害・賠償責任保険			保険会社 (株)損保ジャパン代理店 (有)ツグミ総合保険		
傷害保険		賠償責任保険			
	日帰り	宿泊		日帰り	宿泊
死亡・後遺障害	500万円/1名	470万円/1名	対人賠償	1億円/1人 3億円/1事故	1億円/1人 3億円/1事故
入院	5,000円/1日	4,000円/1日		対物賠償	5,000万円/1事故
通院	3,000円/1日	2,000円/1日			

緊急時の連絡体制

